



葉流香

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼻

【Nコード】

N9127J

【作者名】

葉流香

【あらすじ】

ちよつと背筋がぞつとするような話。

その男性は俯いていた。

普通の人の二、三倍はあろうかという鼻をぶら下げていた。

さらにそれは醜い吹き出物をたくさん表面に浮き出させていた。

がたん、がたん。

僕はじつとみすえた。

電車が揺れるたびに、鼻がかすかに震える。

雲間から太陽がちらと覗く。

その大きな鼻に斜めから光が当たって、陰影がよりくつきりと形をなした。

揺れる車内には、人影はまばら。

朝のラッシュ時と、お昼の中間地点くらい。

黒い詰め襟の学生服を着たばかりと、くたびれたベージュのコートと、灰色のスーツを着たサラリーマン風の大きな鼻。

この時間に、異色の僕ら。

僕は、寝坊。

君は？なんだかちよつとからかうような気分で、僕はかすかに揺れ続ける鼻に、問いかけた。心の中で。

ええつと、僕は、これから仕事だよ。

鼻が応えた。

太陽が雲に隠れた。

鼻がさつと薄い影に覆われる。水の張られた田園。

鼻の背側の車窓に、ずっと広がっている。

羊雲が、空中をゆったりと歩いていた。

これから？遅いね、
もう、お昼に近いよ。

僕はちよいと目を上げた。

くたびれたコート。

ボサボサの黒髪のとっぺん。

至ってふつつの、みすばらしい、サラリーマン。

…分かるだろ？

一際大きな羊に、太陽は完璧に隠されてしまった。
数分は出てきそうにない。

薄暗い車内で僕は黙り込んでいた。

がたん、がたん。

主要な駅を通り過ぎてしまうと、僕ら以外には、とうとう誰もいなかった。

降りないの？

鼻に聞く。

君だって。

鼻が揺れる。

僕は、まだ数駅先なんだ。

「奇遇だね、僕も一緒さ。」

気がつくと、男性は顔をあげていた。鼻は、顔の半分近くも覆い隠していた。その奥で、口がもごもごと声を発す。

「君と同じ駅。」

にやり、と笑ったような感覚。実際、鼻で全く見えない。

「や、止める、着いて、来るな！」

僕は弾かれたように立ち上がっていた。

丁度電車が止まった衝撃で、足がもつれる。

よろけかけたところで、僕はくたびれた男が、立ち上がって、こちらをじっと見据えたのを見つけた。

深く淀んだ眼球には、色がない。小さな黒目が、瞼の奥で、微動だにしない。

背筋を焦燥が駆け抜けた時、

再び、斜光が鼻を照らした。

くつきりと浮かんだ陰影。

醜い疣は寄り集まって、ニヤリと笑った。

もつれた足を振りほどき、その足で、僕は開き始めたドアに突進した。

心臓がバクバク打っていた。

手がふるえていた。

目の奥がじっと熱くなって、

頭が、痛い。

「違うだろ。次の駅だよ。」

強い力が腕に食い込んでいた。逃れられない。

「…っ！なにすんだよ！離せ！」

喉を震わせて、ありったけの声わ張り上げる。手足を滅茶苦茶に振り回して、閉じ始めたドアに、悲痛な思いで手を伸ばす。

指先が微かに触れたところで、ドアは閉まった。

うなだれた首筋に、鼻が醜い疣を押し付けて、今度は男の口で、にやりと笑った。

僕はさっと振り向いた。

すつとんきような悲鳴を上げながら、僕はボコボコの鼻を掴み取り、渾身の力を込めて引つ張った。

男も、訳の分からない悲鳴を上げている。

掴んできた手を振りほどき、僕は男諸共、鼻を床に叩きつけた。

…顔中が痛い。

息が、し辛い。

吐いて吸う度に、ペラペラ音がして、不快だ。

「あ、起きた。」

「ゆ、祐司？」

「おかーさん祐一兄ちゃんおきた」

大声を上げながら弟が遠ざっていくのを、音に聞いた。

「あ、起きたのね、良かった。」

「母さん…僕、なんで…」

「なんでって…手術したのよ、あら、記憶喪失？」

顔中が痛い。顔の、中心特に。

鼻！

「まださわっちゃだめよ。包帯の上からだって。皮膚が剥けてるんだから。」

母が丸椅子を何処からか取り出して来て、がたがたとベッド脇に座った。

若草色のカーテンから陽光が漏れ出して、白い空間が浮き立つ。

母の俯き加減の顔。長い黒髪が頬に垂れている。

ふわりと光る。

「祐司は？」

「待合室で漫画読んでるわ。買ってあげてないから、読みだめする気なのよ。」

「心配されてないなあ…」

「あら、成功率99・99999パーセントよ。」

「結構、危なかったと思うんだけど。」

「そういえば、お医者さんが、切ったはずの所がまたくつついてい

たりで… なんだか訳が分からないけどしつこかった、ておっしゃってたわ。」

…ぞつとする。

（後書き）

後書きつ

使い古されている話だと思われ。
実際電車で見ました。

でも、その時は全くこの話と印象が異なっています。
むしろ逆かな？

なので、なんか、ごめんなさい。
最後あたりは書き込む気力が…
感想諸々、切実に待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9127j/>

鼻

2010年10月19日07時00分発行